



「みわたす・つなげる 自然地理学」

小野映介・吉田圭一郎 編
古今書院、2021年10月
111頁、2,640円(税込)
ISBN 978-4-7722-8120-1

本書は、中学校(社会)や高等学校(地理歴史)の教職課程で必要な自然地理学の授業に使うことを想定して書かれたものである。読者として想定されているのは、教員志望の大学生や、一般教養として地理学を学びたい大学生である。しかし、以下の目次にあるように、「天気」の読者にとっても興味深い内容を含むので、この場をお借りして本書の概要を紹介したい。

1. 自然地理学とはどんな学問か？
2. 内的営力による地形の変化
3. 火山噴出物と地形
4. 地表の変化—風化・侵食・土壌化
5. 段丘・丘陵
6. 沖積平野の特徴と形成過程
7. 世界の気候とその成り立ち
8. 身近な気候と人々の暮らし
9. 気候と生物群系
10. 水文環境
11. 気候変動の環境史
12. 海面変動
13. 地震・津波・火山噴火
14. 気象災害
15. 自然地理学を学ぶ意義

15章立てなのは、半期の授業で本書を使うことを想定しているためである。第1章と第15章は、それぞれ導入とまとめであり、本書のタイトルにも含まれる「みわたす力」、「つなげる力」について述べられている。自然環境の全体像をとらえるために必要な「みわたす力」とは、地形、気候、植生などの特定の視点から対象を多面的にとらえることである。そして「つなげる力」とは、地形、気候、植生などを互いの関連性に基づいて結び付け、総合的にとらえる力である。

目次から分かるように、第2章から第6章までと第13章は地形学に関する内容である。「天気」の読者の興味を引きそうなのは第7章からであろうか、本書の

「はじめに」には、「それぞれの章は独立して読めるようにも工夫されているので、興味や関心に応じてどの章から読んでもらってもかまわない」とあり、自然科学系の中でも専門/興味が異なる読者を想定した工夫がなされている。ここでは、第7章～第12章と第14章の内容について紹介したい。

第7章は「地球の気候はどう決まるか？」という、いわゆる古典的な気候学に関する話である。放射収支と地球の温度、大気循環と世界の気候、海陸分布や地形に影響を受ける気候、世界の気温分布と降水量分布について述べられる。

第8章は、「気候は人々の生活文化にも影響を与えている」という内容である。暑さ・寒さに応じて住居や建物、あるいは衣装や衣服が選ばれることや、水資源と乾燥地の暮らしに関する説明がなされる。日本の気候やアジアモンスーンの説明も本章でなされる。

第9章は気候と植生に関する話である。気温と降水量が植生分布を決めていること、日本は降水量が多いので基本的に気温によって植生の分布が決まること、気候だけでなく、標高・起伏や地形形成プロセスも植生分布にかかわることが述べられている。

第10章は水循環に関する話である。地球上の水の賦存量、海水の化学的特徴と海洋循環、氷河・氷床、地表水と地下水、湧水、および水の性質(特に化学的性質)について述べられる。

第11章と第12章では、過去数十万年間の気候変動と、最終氷期最寒冷期(約2万年前)以降の海面変動について述べられる。気候変動はなぜ生じるのか、過去の気候をどのように復元するのか、といった説明がなされた後、「過去は、現在・未来を考えるための鍵である」という立場から、現在生じている地球温暖化や海面上昇について考える内容になっている。

第14章では、日本で毎年のように発生する水害(大雨、洪水、土砂災害)を中心に、気象災害について概観されている。大雪や高温(猛暑)の事例も取り上げられており、防災・減災に向けたハード対策とソフト対策の両方に言及されている。

実際に大学で自然地理学を講義している評者の感想として、内容が盛りだくさんの章がいくつかあって、1回の授業で章の内容を全て話すのは難しそうだということが挙げられる。また、第8章で日本の気候やアジアモンスーンの紹介がなされていたが、これは第7章に含むべき内容ではないかとも思った。

気候・気象の話が自然地理学でどのように扱われて

いるのか、「天気」の読者の皆さんにもぜひ一度本書を
手に取っていただき、本稿で紹介しなかった章も含め

て御覧いただければと思う。

(東京都立大学 松山 洋)
